



#002
特別
座談会

未来を担う 若手技術者へ

今後、若年層の減少や熟練技術者の退職による担い手不足に直面していく建設業界を魅力的なものとし担い手を確保するために、採用した若手職員をどのように戦力へと育てていくのか。

特に、専門性の高い技術を有する PC 建設業界では、次世代の若手技術者へ丁寧に技術を継承することが重要です。そこで今回は、わが国の PC 技術の発展に貢献して土木学会田中賞業績部門⁽¹⁾を受賞された先輩方に大野達也会長とともに語っていただきました。

※本文中の敬称は省略させて頂きました。 ※撮影時のみマスクを外していただきました。



(1) 橋梁・鋼構造工学に関する優秀な業績に対して授与される賞。
業績部門は、橋梁に関する技術の進歩、発展に顕著な業績を挙げたと認められる者を対象とする。
平成5年度に研究業績部門として設置され、平成27年に現名称となった。

大野 本日は大先輩お三方に参加いただきありがとうございます。現在の建設業界は、若年層の減少や熟練技術者の大量退職による担い手不足を解消するために「Construction」や「働き方改革」などの取組みが進められています。建設業界においては、個人の力が非常に重要であり、若手職員をどのように育成していくか、特に、専門性の高い技術を有するPC建設業界では、次世代の若手技術者へ丁寧な技術を継承することが重要です。

そこで今回は、わが国のPC橋の発展に貢献し、土木学会田中賞業績部門を受賞された則久芳行さん、杉本武司さん、長尾徳博さん、井岡隆雄さんの4名の方の中から、お三方を迎え、長年培ってきた経験から若手技術者に伝えたいことを語っていただきます。

まず、「特に印象に残った仕事はなにか」ということをお話しいただきたいのですが、則久さんからよろしいでしょうか。

印象に残っているお仕事は何か

則久 土木学会田中賞（研究業績部門）を7年前に受賞しましたが、こうした賞をいただけるのは望外の光栄の一言に尽きます。私はPC橋に長



のり ひさ よし ゆき
則久 芳行 氏

平成26年度田中賞(研究業績部門)受賞
(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 元会長
三井住友建設株式会社 元代表取締役会長

年携わり、PCに育てられてきた一人。先達や先輩方から本当に良く指導していただきました。また、同僚や後輩、協力会社の方々に心から感謝しています。

私の約50年の会社人生では、設計・現場・営業・管理・経営といった様々

な業務に携わりましたが、それぞれの部門で熱い思いで仕事をさせていただきました。それぞれの業務においては常にPC技術をベースにした考え方を展開してきました。また、人とのつながりも大事なことでした。仕事を通して、産・官・学の方や協

力業者の方々からは多くのご指導、ご協力をいただきました。大学の先生方には技術・研究の指導はもとより、海外にも目を向けるために海外シンポジウム等に会社の技術者をよく連れて行っていただきました。官の方とは、委員会や意見交換会などで社会基盤整備の重要性についてお互い忌憚のない意見を取り交わすことで、多くの技術開発や技術改良を官民協働で行うことができました。上司、先輩からは社会人としての考え方やPC技術について指導をいただき、同業の方々からは会社の枠を超えた技術指導もいただきました。協力業者の方々からは工事の基本、考え方の基本を教わりました。

私のPC屋としての原点は設計と施工に携わった佐賀県に架かる外津橋、そして本四架橋での数多くの鋼橋技術者、トンネル工事技術者、スパーゼネコン等の技術者と親しく協働した、明石海峡大橋と舞子トンネルの間に位置する舞子高架橋です。

外津橋は、世界で初めてトラス張出し工法で施工したアーチ橋です。アーチ部材を片持ち架設工法で両側から張り出していき、最後に連結してアーチ橋を完成させる架設工法です。この設計は、私が入社3〜4年目の頃で、コンピュータで構造解析し

て「これでできます」と説明しても、世界で初めての工法であるため、誰も信用してくれません。そんな時、建設省土木研究所の橋梁部長からのアドバイスで1/150模型を制作し、実際の施工ステップごとに設計計算値と一致するかを確認しました。その後、現場では測定値と計算値が合致することを常時確認しながら慎重

に施工しました。現場では鳶さんをはじめ皆さんと宿舎で一緒に寝泊まりし、貴重な経験をたくさんした橋梁です。また、印象深いのは、明石海峡大橋と舞子トンネルの間にある舞子高架橋の現場統括所長をしていた時に発生した阪神・淡路大震災です。この時、現場工程表にはない大きな「変化」が

私たちの前に突きつけられました。直ちにその変化に向き合い、今、第一にやるべきことは何なのかを考え、連日、職員・作業員合わせて1000人を連れて応援に行き、災害復旧に貢献することができました。本件事は、その後、国道2号線、JR山陽本線、山陽電鉄等との交差がありましたが安全第一で施工して無事竣工

しました。
大野 則久さんの仕事への関わり方や大学の先生、発注者・同業者の方々や協力会社の方々に向き合う真摯なスタンスが良くわかるお話だと思います。
杉本 では次に杉本さん、お願いします。4年前に田中賞を受賞しましたが、お世話になった関係者の皆さま



▲ 外津橋 トラス張出し工法による施工



▲ 外津橋



▲ 舞子高架橋 国道・鉄道が交差する条件での上部工施工



すぎもと たけし
杉本 武司 氏

平成29年度田中賞(業績部門)受賞
(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 元副会長
株式会社ピーエス三菱 元代表取締役副社長

まには心から感謝しております。
長年、工事部門で仕事をしてきましたし、基本の構造形式や施工方法など選定する委員会にPC建協の一人として参加する機会に恵まれました。

木曾三川橋のひとつである第二名神高速道路(現伊勢湾岸自動車道)の掛斐川橋が特に印象に残っています。掛斐川橋は、皆さんご存知のとおり、河川の架橋条件や経済性から支間長が270mを超える世界初のPCと鋼の複合エクストラードード橋です。

プレキャストセグメント工法を採用し、幅員33m、長さ5m、重量400tのセグメントはショートルインマツチキャスト方式⁽²⁾で製作されました。
製作ヤードやヤードからの浜出し運搬・架設などの各種設備・河川上での柱頭部架設・張出し架設・側径間架設といった、従来の規模や難易



▲掛斐川橋

度を大きく超えた現場でした。そこで再利用や転用を考えた各種設備の製作思想・国内外からの調達・組解体方法や後処理、粘り気が強い60MPaのコンクリートの挿入管を利用した超高压ポンプによるスレンダー断面への打設、変形の大きなセグメントの仮置き時・施工時の形状管理、架設セグメントのサンドイッチ方式の接合、拡幅部の断面分割による側径間架設など、発注者・請負者・協力業者が一体となって知恵を出し合い問題点の解答を引き出し解決できました。

大野 発注者における計画段階の検討において、PC専門業者の知見が取り入れられ、それが施工にも生かされた事例だと思います。

それでは長尾さん、お願いします。
長尾 私は、杉本さんの翌年に田中賞を受賞しました。関係者の皆さまのご支援の賜物と深く感謝しています。

私は15年ほどの現場経験がありますが首都高速道路の工事経験が多かったです。最初は首都高速5号線の現場に配属されました。その橋梁

⁽²⁾プレキャストセグメント工法による箱けた製作方法のひとつ。工場や現場ヤードで製作したセグメントのひとつ分の製作台でセグメントを製作し、既に製作されたセグメントの端面を型枠として次のセグメントを製作する。



▲ 損斐川橋 張出施工中



▲ 損斐川橋 セグメント仮置場

は5径間連続高架橋で上下線全幅が一体構造となった主桁間隔が約9mの2主版桁の橋でした。我が社は東京に進出したばかりで確立した協力会社がいなかったことと、1978年の建設ラッシュに遭遇したため労務不足に直面して非常に苦勞して苦い経験もありましたがとても勉強になりました。

2 度目は首都高湾岸線のBT208工区という3径間連続ピルツ橋⁽³⁾の現場でした。ピルツ橋の連続桁は国内で初めてでしたので、設計照査を担当することになった私としては、工法の開発者であるディビダーク社と関係の深い住友電工株式会社やコンサルタントの方々からアドバイスをいただきましたが、解析

ちよつと振動が加わるだけで5cmくらい沈下するような場所でした。そのような現場条件に対応するために支保工の移動時に底型枠を開閉して次径間へ移動できるような開閉式型枠可動支保工を開発しました。このときに発注者の方と一緒にまとめた論文が「コンクリート工学会賞」を受賞しました。

作業が大変でした。当時はコンピュータがまだ一般的に普及する前で費用はものすごく高価でしたが、アメリカで開発されたばかりのナストラン⁽⁴⁾というコンピュータソフトによる解析のおかげで設計を仕上げる事ができました。私が担当した施工箇所は、地盤が軟弱な埋立地の夢の島で、

その後、首都高6号三郷線のAS21工区というスパン45mの9径間連続高架橋工事を所長として担当しました。この現場は市街地での施工であったため振動騒音対策が必要でした。また工区内に180mほどの水路があり、桁が側道にオーバーハングしているということから、地表面から支保工を立ち上げることが困難でした。このため、ピルツ橋の経験を活かし、公団の方と打合せをして移動支保工による施工法に変更しました。いろいろな問題はありましたが、やれたということが自信になった現場でした。

(3) 上部桁と橋脚との一体構造の橋で、その形状がまのこ(ドイツ語で「ピルツ」)に似ていることから、このように呼ばれている。

(4) NASAが開発した有限要素法(FEM)の大型汎用構造解析プログラムで、一般にZ80(コ)ナストランと呼ぶ。

どのような課題に直面したか

大野 お三方とも、世界初とか、国内初とか、過去に例のないような難工事に挑まれて、無事完成までこぎつけたということですね。直面した課題に対しても何とか解決策を見出されたということだと思いますが、どのような課題に直面されたかをお話

断面より安全に施工できるつくばエクスプレスで採用されたプレテンションU型桁やPC建協が提案して高速道路に採用されているU型コンポ橋による新しい桁形式や機械化施工などが、ベテランの労務不足を解



ながお のりひろ
長尾 徳博 氏

平成30年度田中賞(業績部門)受賞
(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 元会長
株式会社富士ビー・エス 元代表取締役会長

決してきました。

先ほどの則久さん、長尾さんの発言の中にも出ていたと思いますが、きちんと課題を解決し品質に優れた構造物を安全に施工するためには、発注者・請負者・協力業者、それに



▲ BT208工区(首都高湾岸線) 橋脚を避けて移動する開閉式型枠可動支保工での施工

施工に必要な資機材などを提供してくれるメーカーによる協力体制を構築することや、アドバイスをしていただけの大学や公的研究機関のご協力を仰ぐことは必要不可欠です。もうひとつ大事なことは地元の人たちのご理解とご協力が欠かせないことです。

大野 そうですね。2007年問題とおっしゃいましたが、ベテランが

引退していき技能職が少なくなる状況が、今後、より深刻となる。機械化や、施工が容易な構造、生産性が上がる工法。計測技術、ICTとか、まさしく今後に向けても非常に参考になるお話だったと思います。

次に長尾さん、よろしいでしょうか。

長尾 先ほどお話ししたように、私には協力会社の力量不足が課題でした。この問題には相当苦勞させられましたので、協力会社に力をつけさせるにはどうしたらいいのか、ということを日頃から考えておりました。有能な協力会社なくして我々の仕事はできないと身に染みて体験してきましたので、いかに協力会社を使っていたかということに常に腐心してきました。立派な仕事をするにも、協力会社次第だということを痛いほど感じていきます。

大野 協力会社が大事だ、協力会社がないと仕事ができないというお話ですが、今、必要とされる、技能労働者の処遇改善や協力会社のインセンティブを当時、実践されたことはありますか。

長尾 現場が安全に終わり、なおかつ良い製品ができたという場合には、会社として協力会社や職長を表彰しました。PC工事業協会ができてか



▲ AS21工区(首都高6号三郷線) 桁下空間の条件に左右されない移動吊支保工での施工



▲ AS21工区(首都高6号三郷線)

らは、我々の協力会社も加盟していますが、会社が費用を補填することで基幹技能者の教育等には率先して参加してもらって、協力会社に力をつけてもらうようにしています。
大野 わかりました。では、則久さんお願いします。
則久 これまでの業務、各部門でその時々で直面した課題があります。

当然、課題は各部門すべてに連動しています。PC分野だけでなく、一般土木、建築でも一緒に汗をかいて課題に対処してきました。課題解決のためには先ほどから話が出ています。おり、産・官・学の方々との協力と協力業者との連携は欠かせません。基本的には「皆で一緒にやる」ということです。

大野 皆で一緒にやるということは、言うのは簡単ですが、実際にやるとなると意外に難しいのではないのでしょうか。今は特にコロナで接触が限定されているので特に難しくなっています。
則久 私は田舎育ちですから、子どものころから「皆で一緒にやる」という考えを持っていました。それと同じで、業界でも技術上でのことや技術改善は皆と一緒にやる、苦勞するのは皆一緒。これが根本精神です。コロナの時代になってテレワークを始め、新しい仕事のやり方を考えて実

行するチャンスですが現場が第一だという考えは変わらない。皆と一緒にやるということと何ら相反することではありません。コロナ禍のここ2年間で、いろいろな面で非常に苦しかったけども、週休2日とかプレキャスト化、新素材の採用とか、新たな方向性の話がどんどん出てきています。

後輩社員への指導の工夫とは

大野 それでは、次にお話いただきたい現場での経験や課題解決について、後輩社員たちにどのように伝えてこられたか、後輩社員への指導でどのように工夫されたか教えていただけないでしょうか。長尾さんからよろしいでしょうか。

長尾 私の経験から、過去の施工ミスによる災害等を、いかにして同じ災害を起らないようにするかを工夫しました。何十年前の先輩の例ですが、グラウト作業中にセメントミルクが作業員の目に入ったことがありました。あまり深刻に考えずに目を水洗いしただけで済ませました。それから現場が終わって地元に戻って半年後にその人が失明したのです。当時、グラウト材には膨張剤としてアルミ粉末を使っていましたので、



座長 おおの たつや
大野 達也

(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 会長

アルミ粉末の破片が目や瞳孔の中に入り込んだのです。そうした経験を聞いていたので、私の現場でも同様の災害が発生しましたが作業員をすぐに病院に連れて行き、アルミ粉末を取るように指示しました。ちなみに、現在は膨張剤にアルミ粉末は使

用していません。このように、皆でミスを共有することで、同じミスを避けようと考えて、自社の施工ミスや災害を全部寄せ集めて、「こうすれば解決する」という解決策までつけた事例集を作成しました。いわゆる「他山の石」です。

現場に入る前に施工検討会等を行います。その中で施工ミスや災害の事例を頭に叩き込んでから現場に行けば、二度とそういうことは起こさないとは私は経験上、そう思います。経験値を共有することで、前もって知識があれば、事故も施工ミスも限りなく少なくなると指導しています。

大野 PC建協でも会員に向けて「ヒヤリハット事例集」というものをまとめています。それを読んで同じようなことのないよう、皆で再発防止をしようと業界全体でやっています。何かご助言等をいただけますか。

長尾 自分の所のミスをクローズするといいますが、なかなか自分の悪いところは出せないで、隠れた事故とか施工ミスとかがあります。それをどのように情報交換して、お互いにコンセンサスを得るか。今後持ち寄って事例集を作れるのか。というのはあるのではないかと思います。**大野** 確かに会社の中でもなかなか出ないケースもありますから、難しいことはあるかと思いますが、PC業界全体のクオリティを一律に上げていくことは重要でしょうから、何かできることがあればやりたい。またご助言があればいただきたいと思えます。

それでは則久さんお願いします。

則久 私は課長の頃から部下には「常に積極的に前向きに、明るく、厳しく」といつてきました。後漢書に「疾風に勁草を知る」という言葉があります。困難や試練に直面した時に初めてその人の人間としての値打ちがわかることのとえですが、トラブルがあつたらまず現場に入つて、真摯に対応していくことを指導してきました。また、次の時代がどうなっていくかを求められるかを想定して、それに応じることのできる技術であつたり、素材であつたり、設計手法であつたりを取り入れる、生み出すことを考えて行動するように、を指導方針として心掛けてきました。

「歴史を振り返ると、技術の進歩は現状から一歩踏み出そうとする人たちによって達成されてきた」とは、ある先輩の言葉であります。私も先輩にその趣旨を伝えてきたつもりです。社会が直面する課題を認識し、その解決策を提示することが技術者には求められておりまして、技術を通して社会に貢献することが我々の使命です。それらを先輩たちに受け継いでいってほしいと思っております。国際コンクリート連合（fib）会長になった春日君（春日昭夫副社長）のような人物が出てきたのは日本のPC屋のひとりとして大変誇

りに思っております。

大野 一人の同業者の人間として春日会長のような方が日本を代表してfibの会長になられたことを誇りに思っております。

次に杉本さん、よろしくお願ひします。

杉本 私が育った時代は、PCのベテラン社員も不足気味で入社後1カ月の研修を修了した後は実戦力として現場に組み込まれました。だから、先輩から懇切丁寧に指導を受けることもなく、先輩のすること・考えること、背中を見て自分なりの考えをまとめ仕事に生かすことを、繰り返して重ねることにより実力をつけていった時代でした。その経験と改善点を含め、自分が指導的立場になったときは一番大事にしたことは事務所内をオープンな雰囲気にしたことです。若手職員に手取り足取り教えるのではなく軽く要点を教え、その上で本人の意見を聞き自分なりに計画を立案させ、他の職員参加の全体場で意見を出し合い自由に議論しあい、計画を練り上げるようにしました。こうすることにより本人の意見が採用されると非常に励みになって、次も意見を出そうという意欲が生まれたと思います。

昔から「段取り八分仕事二分」の言

葉どおり施工前に入念な計画が作成できれば仕事の大半は終わることの大切さを教えました。そのためには現地・現場での下調べを十分に行い、立案後も再度現場に立ち返ってチェックしてから先に進むように指導しました。また、最近のようにCIMにより事前にあらかた三次元チェックができない時代でしたので施工開始時には別々に描いた図面を組合せ、時間を十分にかけ慎重にPC鋼材や鉄筋を組み立て、その手順が問題ないことを確認したうえで次の工程に進むように指導しました。どうしても組める状況でなければ設計の段階まで戻すことを厭わず、計画を見直して再スタートを切っても最終的にはその後大きな問題を起こすことなく、早く仕事が終わることを意識させ「急がば回れ」を徹底させました。

工程・品質・安全・工事原価・発注者対応・地元対応など社内組織である工務監督室による月1回の巡回パトロールを行い指導・指摘し改善に努めていましたが、特に経験が少ない所長、不安要素を抱えている現場、多忙を極める現場などでは1日単位の指導・教育では不十分であったので、①災害・不具合の発生の未然防止、②発注者・協力会社との対

応方法、③技術者のスキルアップなど現場業務の留意点・勘所をベテラン職員で組織した『シニアマイスター』がある一定の期間、対象現場に常駐して高圧的でなく気軽に話せる雰囲気を作って指導・教育してきました。

大野 先輩の背中を見て育つ、それもちろん重要ですが、今の若い人たちはマニュアル世代でテキストで学んできた世代。インターネットで簡単に調べられる時代を生きている若い人や中堅の人に対しても、オープンな環境作りとか、あるいは、段取り八分とか、急がば回れというのはやはり重要だということでしょうか。**杉本** ネットなどでさまざまな情報知識を得て自分が今やっていることにちょうど当てはまるかどうか。基本的なことはわかっても、現場は千差万別ですから、多くの現場経験を積み知識を蓄え、応用できる力を養っていくことが大事だと思います。

どのように技術力を身に付けさせたか

大野 どのようにして後輩社員に技術力を身に付けさせたかという質問をさせていただきます。則久さんからお願ひします。

則久 私たちは橋梁建設に携わる上で、土木学会田中賞(作品賞)やPC工学会賞を受賞できるような作品に関わることを目標として、それを誇りとしてきました。先輩たちから伝えてもらったPCスピリットは今も後輩たちがしっかりとつないでいてくれています。こうしたスピリットの継承はPCに限ったことではありませんが、会社では常に目線を高くし、チャレンジ精神で思い切った前向きにやって欲しいと言ってきました。

私自身もそうでしたが、設計と現場を行ったり来たりして、自分の設計したものを実際に作る。想定していたものがそのとおりでできればよいですが、現場では必ずしもそうはいきません。修正したり、変更したり、現場を体験することによって得られる知見は大きなもので、必ず次に生かすことができます。図面と現地で寸法は同じでも、立体感や感覚的なイメージを持つためには現場での経験が大切です。また現場での技術力アップには設計的な感覚や知識が必要で、両者を併せ持つことで、技術力の向上、新技術の創造につながっていくと考えます。また、考え方や考えたことを仲間たちで熱く議論してリスクを最小限に、効果を最大



▲ 外津橋での仕事(前列中央が則久氏)

限にすることで技術力向上になると思っております。

また、社内だけでは限界があります。産・官・学が集う協会活動やいろいろな委員会活動にできるだけ参加することや海外を見据えたグローバルな視点で技術力を高めることを促してきました。

大野 ありがとうございます。では杉本さんお願いします。

杉本 私は、段階的にチェックしていくことが非常に大事だと言ってきました。例えば「荷重のプラスマイナ

スを間違つてインプットする小さなミスが構造物そのものの破壊させる大きなミスにつながるかもしれない」という危機感を意識させ、ミスを未然に防ぐことができる各段階でのチェックの必要性・重要性を徹底させました。

時代とともに現場の分業体制が進んでおり、職員以外に関連業者が作成する計画も最近では取り入れていきます。特に総括する立場の主任には、そのまま受けとつてまとめるのではなく、それぞれの計画に使用している基準や示方書の確認、応力が許容値以内か、応力は満足していても使用場所・使用部材に合った変位量・変形量になっているかなど必ず自分でチェックすることが大事です。これをきちんとこなしていくことが、本人の実力アップにも大いに役立つということを、理解し実行してもらいました。

前の工事が順調に完成したので今度の同種工事と同じような段取りでただ計画するのではなく、その工事中に気づいた改善点・改良点を書き留めておき、次の工事に生かしていかなければ進歩を望めないことを指導しました。

大野 ありがとうございます。それでは長尾さんお願いします。

長尾 私たちの仕事は技術力がない



▲ 揖斐川橋での仕事(前列最左が杉本氏)

と良い仕事はできないということが基本だと思えます。ですから、後輩たちには、常日頃からいかに技術力をアップするかということを考えるように言っております。今、いろいろな設計に携わっていても、基本的なことをきちんとやらないで現場をやっているのではと心配しております。

設計で実際に手を動かしてやるのが少なくなり、原理原則がわからなまま仕事にかかる、というようなことがあるのではないか。何か月か新入社員研修を受けて、現場工事に

出して、先輩たちがいろいろなことを教えて順番にやっていくのですが、それでも基本の原理原則がわかっていないと、消化不良を起こすことがあるのではないかと思います。現場においても一人ひとりがスキルアップできるようにと考えて、先輩が講師としてグループで現場に行き設計から架設まで指導する。いろいろな基本的なことを実際に現場に行つてクラスに合わせた講習を定期的に行うようにしています。わからないことは、年代や知識の度合いによって違いま



▲ AS21工区(首都高6号線三郷線)での仕事(左端が長尾氏)

すので、クラスごとのカリキュラムを作って勉強会を行い、スキルアップにつなげています。また、技術力の向上のためには勉強というところでPC工学会誌の購読や国内外のシンポジウムなどへの参加を強く勧めました。

私どもの仕事は他分野の人の知恵を借りてスムーズに行えることが結構あります。このため、ヒューマンネットワークの活用というか、同窓の仲間との付き合いが自分のためになるということは指導しています。同窓の人たちとの付き合いがあれば仕事の幅が広くなり、また自分も勉強したりする。そういう人との付き合いは大切にするように言っております。

若手社員へのメッセージ

大野 以前より設計部署が縮小している状況で、設計を学ぶ機会が減っていますが、各社共通の悩みと伺いますが、その中で、クラス別の勉強会とか、シニアマイスターとか、非常に参考になる取り組みであると拝聴いたしました。

それでは最後に、若手社員に伝えたいことを教えてくださいと思います。杉本さんからお願いします。

杉本 入社後10年を目途として成長過程に合わせて新入社員研修・フォローアップ・スキルアップ・ジャンプアップなどきめ細かく研修を実施し、経験が偏らないように設計と工事の両方を経験させるローテーションにより、設計では構造に関する基本的なことを覚えてもらい、工事でモノづくりのイロハを学ぶように体制は整っているのですが、まず必要なのは本人が意欲を持って取り組むことが大前提です。この意欲の源は入社試験面接の折、建設業界で働いてみたいと語った熱い思いや、入社式で述べた希望に満ちた決意ですので、いつまでも忘れずに持ち続けてほしいと思います。

社会に出れば、当然、思い描いていたことと現実のギャップに多かれ少なかれ、どなたでも必ず突き当たると思います。忙しい現場で休みもなく働かされる日々が続くことになったりすると、こんな忙しい仕事は嫌だ、転職だと考えたり、自信を喪失して短絡的に俺はこの仕事に向いていないから転職するなどと早まらず、推薦してくださいました先生、配属先の上司、上司でまずなければ研修会の講師に、まず相談してください。一時は迷って1年、2年と実務を経験すると携わった仕事も完成し、達成感や

喜びを味わうことができ、仕事への意欲も一段と高くなると思います。経験工学といわれるこの世界です。成長するためには小さな失敗を数多く経験して蓄積し次につなげることが大切で、ここから会得した対応力や勘所を抑える能力を生かして、失敗を恐れず大胆かつ繊細な気持ちをもってチャレンジしてください。

大野 「こんなに忙しい仕事は嫌だ」と転職するというお話がありました。が、業界全体で平準化に取り組み、何とか休みを取れるようにした上でモノづくりを進められるようにと、PC建協も一生懸命取り組んできました。お三方にもがんばっていただいたおかげで、このところ、週休2日は、随分、実施率が高まっています。

では長尾さん、お願いします。
長尾 我々の仕事は公共の社会基盤整備などを一生懸命行い、社会の安全・安心や、社会の利便性に貢献しているということを自覚して欲しい。誇りを持つてものづくりができる環境にあるのだから、若い人たちにはそうした自覚を持つてしっかりとやっていただきたいと思っています。特に我々がやっていることは、特定の人のためにしないといけないのかではなく、不特定多数の社会の利便性のためにやっているもので、そこにやり

甲斐があるのだよと伝えていきます。もうひとつ、現場では書類が煩雑になったため、その書類の対応に時間を費やして、実際現場を見る機会がだんだん疎かになっているのではないかと感じています。「我々がやっている現場は一刻、一刻と変わる生き物。現場には確実に目を通すこと」と後輩には言っています。

何より若い人達に伝えたいのは、自分たちの仕事が完成した時の喜びです。仕事で苦労して汗や涙を流したほど、完成した時の感激はより一層増す、ということをつけ加えさせていただきます。

大野 達成感があると、感激はひとしおだと思えます。ぜひ若い人に感じていただきたいですね。それでは最後に則久さんお願いします。

則久 若い人たちに伝えたい3つのキーワードがあります。第一に「失敗を恐れず積極的に行動する」ことです。若い人たちは「試行錯誤」しながら仕事をしていくことになりませんが、失敗しても挫折することなく解決策を考えてやり直すことが大事で、失敗を自分の糧とする前向きな姿勢で取り組んでください。第二に「コミュニケーションと報・連・相(報告、連絡、相談)を確実にすることです。組織として仕事を進めるためにはコミュニ

じていただきたいですね。それでは最後に則久さんお願いします。

則久 若い人たちに伝えたい3つのキーワードがあります。第一に「失敗を恐れず積極的に行動する」ことです。若い人たちは「試行錯誤」しながら仕事をしていくことになりましたが、失敗しても挫けることなく解決策を考えてやり直すことが大事で、失敗を自分の糧とする前向きな姿勢で取り組んでください。第二に「コミュニケーションと報・連・相(報告、連絡、相談)を確実にすることです。組織として仕事を進めるためにはコミュニケーションが不可欠であり、状況に応じた正確で素早い情報の伝達が大切です。第三は「変化に対応する柔軟性とスピード感をもつ」ことです。現場において想定外の「変化」が生じた場合、その変化に向き合います。第一にやるべきことは何なのかを考え、素早く軌道修正を行い、即実行することができるよう日々自己研鑽に励むことが大切です。そして、最後にになりますが、国内にとどまるだけでなくぜひ海外へも雄飛して、PC橋を建設し活躍することを期待しています。

大野 ありがとうございます。

皆さん、今日は私どもの業界の若い人たちに向けて貴重なお話をいた

だき、本当にありがとうございます。まだまだお元気でご活躍を続けていただき、引き続き、私どもにご指導をよろしくお願いいたします。皆さん、本日はほんとうにありがとうございました。



▲ 座談会終了後 2021年10月18日、東京都千代田区・グランドアーク半蔵門 和の間にて

座談会を終えて

PC業界の重鎮であるお三方のお話を聞くことができたことに感謝するとともに、この座談会の座長を務めさせていただいたことを心より光栄に思います。お三方のお話の中で感じたことが3つあります。

まず、臨場感です。直面する課題とその対策を実に具体的にリアルに説明していただきました。それは何十年前も前の昔話のレベルでなく、あたかも工事現場の作業前打合せに居合わせたような感覚でした。お三方が課題とその解決に対し真摯に向き合う姿勢を今も持ち続けておられると痛感しました。

次に、いまだ冷めやらぬ熱量です。設計、施工、管理、そして経営への情熱が言葉の端々に表れて



(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 会長

大野 達也

いました。そして愛情です。PC事業への、PC業界への、仲間たちや同業者、協力会社、そして後輩たちへの絶えることのない愛情に大変共感しました。お三方の熱い思いは間違いなく、この紙面を通じてそれらの方々に伝わるものと確信しております。

則久元会長がおっしゃった「PCスピリット」ですが、それには多様性があり、PC業界のさまざまな方々のさまざまな思い入れの中で根付いていると思います。お三方のお話をお聞きし、臨場感や熱量に刺激を受け、絶えることのない愛情に励まされ、私の胸の奥底にある私なりの「PCスピリット」が触発されたのを感じました。あらためてお三方に心よりお礼を申し上げます。